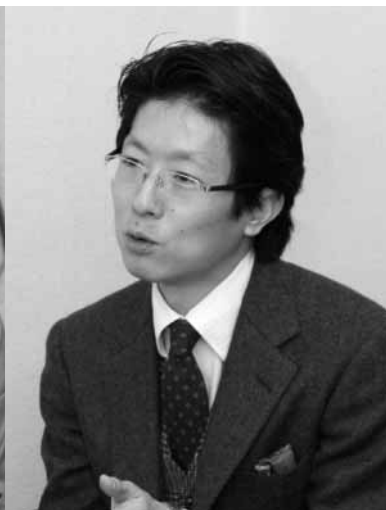


特集

核家族 の現在



首都大学東京大学院
人文科学研究科 教授



上智大学
総合人間科学部 准教授

江原 由美子 **田淵 六郎**

対談

アンビバレンスの なかの家族

少数派になりつつある核家族 ——多様化する結婚・出産のタイミング

田淵 晩婚化、未婚化が進む中、社会の中での「核家族」の位置づけが変わってきています。また、結婚や出産のタイミングは多様化しています。

江原 結婚や出産のタイミングの多様化は、データにも表れているのでしょうか。

田淵 厚生労働省の「人口動態統計」をみると、夫、妻の結婚年齢・出産年齢は、晩婚・晩産の増加につれて高くなり、経験年齢もさまざまになっているのが特徴です。

江原 この10年間でライフスタイルは多様化し、未婚化および少子化が確実に進行しています。そのような中、いまの30代~40代にとって、結婚して子どもがいる、核家族を営んでいる人自体が、都市部では相対的に少数派になっていますよね。結婚や出産をした人たちだけのデータでは見えない変化があるのではないですか。

田淵 東京では、エリアによってかなり差があるようです。

例えば、都内でも出生率の高い江戸川区や足立区などには、若い家族向けのマンションがたくさんできています。江戸川区で子どもを持つ若い夫婦が増えている背景には、子どもへの福祉や手当も充実していることがあると言われてますね。

江原 他方、例えば1970年代に入居の始まった日本最大規模の多摩ニュータウンなどのように高齢化が進んでいる地域もありますね。地域差が大きくなっているのですね。

現代の都市核家族の生活は、ほかにどのような傾向がみられますか。

田淵 今回の特集に掲載されている論文は、いずれも財団法人家計経済研究所が実施した「現代核家族調査」に基づいた研究ですが（この調査の概要については本号所収の「現代核家族調査」の概要を参照）、この「現代核家族調査」の報告書（財団法人家計経済研究所 2009）を見ると、変わっている部分と、あまり変わって

いない部分とが両方あります。ただ、全体としては、それほど大きく変化していないという印象です。

江原 そうですね、データを見ると、わりと「健全」というか、夫婦関係もそれほど悪くない。

田淵 晩婚化という状況のなかで、もともと結婚や家族生活を志向する人たちが先に結婚して家族をつくっているから、家族を営んでいる人たちを対象にした調査結果をみても、大きく以前と変わってはいないということになるのかもしれないですね。また、全体としては変化していても、核家族だけを取り出してみると、変化がわからないだけかもしれないですね。

江原 夫と妻、父と子、母と子など、それぞれの関係でみれば、基本的にはそれほど変わっていないということでしょうか。

田淵 そうですね。全体としては、かなり安定しているといえます。

二極化が進展する夫の家事・育児参加意識

田淵 「現代核家族調査」では、夫と妻の「意識のズレが拡大している」との興味深い指摘もありますね。

江原 核家族の中の変化と、核家族の外で起きているシングル化などの傾向をまとめて考えてはいけないのでしょうか、全体としては、個人の多様性が大きくなり、同じような生き方や考え方をしている人と暮らしている傾向が減って、家族の中でも外でも、皆の考え方がバラバラになっているような印象があります。

田淵 総務省統計局の「社会生活基本調査」などを見ると、父親が育児に従事する時間の平均はごくわずかですが増加しています。ただ、平均だけで増加と捉えていいのかどうかの問題があります。

例えば、「現代核家族調査」の報告書でも、育児に毎日参加する父親の割合が低下していると指摘されています。平日に育児をする父親の割合はそんなに大きく変わってなくて、両極化というか、「一生懸命、育児に参加する男性」

と「そうでない男性」に二極分解しているとも述べられています。

江原 2000年代では、平均すれば、父親が育児に従事する時間はわずかに増えているけれど、一方で全く育児をしない父親もまだたくさんいますよね。

田淵 「社会生活基本調査」は全国調査の結果ですから、都市部だけでみるとどうなっているのか。二極化がもっと進んでいるかもしれません。

江原 二極化傾向は、家事労働のデータにもはっきり表れています。2000年の「NHK国民生活時間調査」によれば、日本人の30代男性の家事労働時間は24分でした。

でも、この数字が意味しているのは、多くの30代男性が家事を一日20～30分するというものではありません。約3割の人は、1時間半ぐらい家事をしている。でも残りの7割の男性は全く家事をしない。結果として平均20～30分になっている。男性の家事時間は個人差が非常に大きいのです。

田淵 育児や家事に参加する男性が少ないため、メディアもある種のパイオニアとして取り上げるんでしょうね。

江原 おそらく、そうしたメディアの影響があるのでしょうか。最近では女子学生からよりも、むしろ男子学生のほうから、子育てに大きな期待を抱いているという言葉が聞かれます。教え子にも、「子どもが好きだから、早く結婚したい。そして子育てしたい」という男子学生がいます。とはいっても、その男子学生が、自分一人で育児をすると考えているわけではありません。あくまで、夫婦二人での子育てを強く望んでいる。家族や「愛」に対して、夢を抱いているのでしょうか。それでも「妻が外で働き、夫(自分)が家事・育児」でも構わないから子どもを持ちたいとか、共働きで一緒に平等に子育てしたいと考えている男子学生が、結構います。

変わる女性の結婚観

江原 しかしそういう男子学生がいる一方で、一般的には、若い世代では結婚・出産への関心は、低くなっているようですね。男女とも仕事志向が強まっていて、恋愛関係の優先順位は低いと考える学生が多くみられます。同棲中でも、お互い「仕事が最優先」で、就職後の赴任先が違えば別れるのが当然と考えるカップルもいます。私たちの世代とは違うな、と驚きました。

他方、女子学生の中には、仕事志向を持たず、専業主婦志向が強い人も少なくない。多様化ですね。

田淵 橋木俊詔さん(同志社大学教授)がおっしゃっている「女性格差」、専業主婦とそうでない女性、正規と非正規の格差ですね。

非正規で条件の悪い仕事を続けていくことは選択肢として難しいため、結局そうした女性たちの中で、専業主婦化を望む傾向が強まるという議論があります。

江原 でも彼女たちは、志向的には専業主婦化ですが、現実には結婚して専業主婦になっているかどうかということは、微妙ですね。自分が非正規雇用だから、「いい結婚相手」を見つけなきゃいけないという思いが強いからです。結婚相手に高所得を求め、そのため相手が見つからず、晩婚化につながっているという調査結果もあります。

田淵 なるほど。そのように、非正規でいい相手が見つからず晩婚化する女性がいる一方で、高学歴、高所得男女のカップルが結婚する事例が少なくないというのは興味深い現象でしょうね。

江原 女性ニートに関するデータ(財団法人横浜市男女共同参画推進協会 2009)を見ていて驚きました。対象者である女性は、大半が派遣などの短期で不安定な仕事を転々とし、現在何らかの就労支援を受けている女性ですが、彼女たちの中で「性別役割分業」について、「賛成」する人が非常に少ないんです。このような層は、どんな意識調査や統計調査にも出てこないと思

うのですが、いわゆる生活困難に陥っている層の人がいることには留意しなければならないと思います。

田淵 そういう層の人たちは、親と同居しているのですか。

江原 ええ、大半が同居ですが、親も経済的困難層が多い。親の面倒を見ている場合もあります。なので「親元で結婚まで花嫁修業」とはいいかないのでしょうか。その実感が、「結婚して専業主婦になれる」ことを前提とする「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業への賛成が少ないという結果につながっていると思います。かつての「性別役割分業」とは、「稼げる男性と結婚できてこそその夢」なんですよ。

田淵 性別役割分業について、そもそも「専業主婦を希望するか」という質問自体が成り立たない層が拡大しているんですね。

江原 「専業主婦になる」＝「男に養ってもらえる」というのは、バブル時代、あるいは日本型雇用慣行の時代にしか通用しないのでしょうかね。

田淵 そう言われてみると、「専業主婦を希望するか」という質問自体、みんなが一度は結婚するということが前提となっている感じがします。そういう質問がもうナンセンスになってきたということなのかもしれません。

江原 2030年には生涯未婚率は女性で22.5%、男性で29.5%にもなると予測されています（国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計（全国推計）」（2008年3月推計））。子どもがいない人も増えると予想されますが、そうした未婚単身の何割かは、貧困層に陥ってしまうリスクが高いでしょう。

現状では、女性は、仕事を持つか、結婚するか、どちらかをつかまえていないと大変なことになる。だから皆「保険」をかけて仕事と家庭双方を手に入れようとするのでしょう。その優先順位の付け方が、変わってきています。かつては結婚優先。なので、まず結婚を優先して、うまく両立できるようなら、仕事を続ける。仕事がうまくいかないと専業主婦

の道を選ぶ人も多くいました。でも近年の女性の多くは、まず仕事優先です。仕事を持っておいて、その仕事と両立可能な範囲で結婚と子どもというように、優先順位が逆転した。仕事も結婚もどちらもリスクが高いので、両方を追わなければならない必然性があるのだと思います。

でも、仕事も結婚もうまくいっていない女性はどうなるのでしょうか。こうした人は、高齢期をどのように乗り越えればいいのでしょうか。早急に社会システムを改善しないと、貧困層に落ちるリスクが高まるでしょう。

常勤層の育児専念への賛成 ——その背景に隠された理由は

江原 今回の「現代核家族調査」で興味深いと思ったのは、妻が常勤の層で「女性は、子どもが幼いうちは育児に専念すべき」という育児専念への賛成が、10年前と比べて増えていることです。

田淵 厚生労働省の「21世紀出生児縦断調査」のデータを見ても、常勤の女性の大半は結婚や出産を機に退職しています。

核家族を議論するにあたっては、この10年の間の育児休業の普及の意味を、雇用の視点・家族の視点から考え直す必要があるでしょうね。

江原 育児専念への賛成が増えているのは、一見すると「保守化」や「以前の核家族観に戻っている」などと読めそうにみえますが、そう考えるべきではないと思います。

かつては、「女性は働くべきではない。家事に専念すべきだ」との考えが根強くありました。ですから、働く女性は社会からの批判的な視線を感じていたため、いろんなロジックを使って、働くことを正当化してきたんですね。例えば、「育児に専念しなくても仕事と両立できる」だとか。

ただ、両立するのが当たり前になってくると、今度は現実の育児の大変さを本音で言えるような意識になってきた。だから、常勤層の育児専

念への賛成が増えたのだと思います。

田淵 現実に両立することは大変だという意識があるから、結婚や出産を機に退職する人も少なくないんでしょうね。

その際、男性の家事・育児参加が高まれば、女性の退職は押しとどめられるのでしょうか。

江原 夫の育児参加が会社の制度を変え、それによって男性の育児休業取得が当たり前の社会になれば、きっと変わってくるでしょう。個人の意識だけでは、女性の退職は止められないと思います。

社会全体の支えがあれば、仕事と育児の両立に耐えられるはずですが、でも現実には、支援が全く追いついていません。「支援がなくても、女性は働ける」との思い込みは間違っていると思います。

田淵 身近な女子学生に話を聞くと、母親として子どもの世話や教育を一生懸命やりたいと思っている学生が少なくありません。でも、共働きではそうしたことが十分にできないと思っているようですね。

だからこそ、夫に働いてもらい、自分は母親として子育てしようと考えているのだと思います。高学歴だからこそ、自分の子どもにも、できるだけのことをしたいと考え、働くことではなく、家庭にいることに傾くのではないのでしょうか。

江原 かつては、そのように「子どものために」という理由から、仕事を辞める女性が多かった。でも最近では、そうできないことが多い。その背景には、男性側の雇用不安があります。近年の厳しい経済状況の中では、いつ男性が会社をクビになるかわからない。育児に専念したいと希望する女性も、そのリスクをふまえると、自分も仕事を続けるほうが良いと考え始めているんです。

つまり、子育てにもっと時間を割きたいと思いつつ、仕事もやめられない女性が多くなっている。そういう状況で、両立のつらさの方が大きく感じられる、そういう女性が常勤層の中にはかなりいると推察します。

専業主夫・主婦が抱えるリスク

田淵 大卒者の就職はますます厳しくなっていますね。就職活動しても、なかなか第一志望、第二志望の内定は取れない。ようやく内定を取れても、その企業での仕事にあまり関心を持ってないなど、景気の影響がライフコースに与える影響が大きくなっています。

江原 そうした雇用事情が背景にあるだけに、偶然に素敵な異性と出会えば、男性でも女性でも、専業主婦や専業主夫になりたいと思う気持ちも生まれますよね。かつてゼミで、「自分が就職できない状況で、たまたま裕福な女性にプロポーズされたらどうするか」という質問を男子学生にしてみたことがあります。すると「結婚して専業主夫になります」「渡りに船です」と答えたのは、10人中2人でした。専業主夫にはならないと回答した8人は、「将来捨てられたとき困るから」「やはり自分が働き、妻を食わせたい」など、意見はさまざまでした。

総じて、私のゼミの学生は、専業主婦・専業主夫になるのに不安を感じているようでしたね。専業主婦になるのも不安、仕事も厳しい、辞めるという選択や両立という道もない。どれを選んでも、リスクが大きいんです。どう生きていけばいいのか、わからないですよ。多くの学生が、途方に暮れています。

働き方による家族の格差

田淵 核家族が少数派になりつつあることを前提に、核家族自体が今、どのような流れの中にあるのか考えてみましょう。

夫婦関係と親子関係は、相互にリンクしています。日本家族社会学会の「家族についての全国調査」などのデータを見ると、夫婦関係が相対的に良好な人たちのほうが、父親が育児にコミットしています。

江原 育児にコミットしている夫の方が、夫婦関係が円満であるという逆のことも言えますね。

田淵 夫婦関係と親子関係を、一体のものとして考える必要があるでしょうね。言い換えれば、夫婦関係も親子関係も良好な人たちと、どちらもうまくいっていない人たち、この両極端に分かれるといったシナリオも考えられます。

長時間労働をするなど、厳しく働かないと雇用が危うくなりそうな層では、父親の育児参加などとても無理です。ストレスがどんどん蓄積され、家庭全体にひずみが生じるケースもあるでしょう。

そうしたグループが増える一方で、夫婦関係も親子関係も円滑に行われている、恵まれた層もいます。

江原 それは階層と直接関係があるのでしょうか。もしくは個人的な問題でしょうか。

田淵 階層は大きな要素の一つでしょうが、それだけではないと思います。例えば時間をどの程度自由に使えるか、フレキシブルに使えるかなど、少なくとも家事・育児には、いろいろな要素が影響してきます。

江原 シングルマザーについてのデータを見ると、彼女たちが長時間働いていることがわかります。選択肢は事実上非正規雇用しかありませんから、稼ぐために2、3の仕事を掛け持つケースも多い。結果として、かなりの長時間労働になり、中には1日15時間働く人も。それでも年収は100万～300万円ぐらい。現代社会は、ひとりで子育てしている人々の貴重な育児時間を奪うかのように、そうした人々に長時間低賃金労働を強いる結果になっているのです。こうしたシングルマザーの家庭では、第一の仕事から帰り、子どもに夕ご飯を食べさせたら、また第二の仕事に出かけるというような、母親がほとんどいない状況で、子どもは成長していかざるをえなくなっています。共働きの夫婦でも、似たような状況になっている家庭は少なくないでしょう。

田淵 夫婦ともに雇用の不安定化が進んでいる家庭では、そういうケースが増えるでしょうね。

江原 父親は長時間労働、母親は非正規雇用と、子どもとかわる時間が少なくなりがちです。

中には、夫婦関係において互いにストレスが溜まり、子どもにも悪影響を及ぼす家庭もあるでしょう。格差社会の影響は、少なからずあると思います。そうした家庭に対して、しっかりと子育てできるような労働環境の整備が必要だと思います。

田淵 「現代核家族調査」の報告書を見ると、子どもと多くかかわっている父親は、父親自身の満足度も高く、子どもにもよい影響を与えているようです。他の調査研究でも、これはよく言われていることですね。

その背景にあるのは、家庭の時間的な余裕の差が考えられます。階層差は、父親同士の中にも存在していて、シングルマザーのみならず父親についても、「育児の時間が取れない」「子どもにかかわりたくてもかかわれない」層が、ここ10年で顕著に分化してきている気がします。

父親のロールモデルの必要性

江原 妻の夫に対する評価は、夫が育児にかかわると高くなります。夫婦関係を良くする一番の方法は、育児参加かもしれませんね。

逆に、夫が育児にかかわらなかった場合、妻は一生根に持ちます(笑)。

田淵 2000年代に入っても、「社会生活基本調査」データなどを見ると、共働きでも片働きでも、夫の家事・育児参加はそれほど増えていません。

平均で見ると、男性は、時間的に余裕があってもなくても、家事・育児はしないんですね。階層差ができたとはいえ、時間的に余裕ができれば、男性の家事・育児参加は変わらないことを捉える必要があると思います。

江原 余裕があれば必ずかわるかといえば、そうでもないですね。意識の問題なんですか。

田淵 この問題については、もう少し研究してみたいと思っています。単なる意識の問題と片付けられるのか、夫婦間のパワーバランスの問題なのか、あるいはもっといろいろなライフコ



一的な経験やきっかけの積み重ねが絡んでいるのか。いろんな見方ができると思います。

江原 男性の家族とのかかわりと男性アイデンティティの問題は、非常に大事だと思います。現在の学校では、「父親になることとは何か」「家族において男性がどうあるべきか」などは、全く教育の主題にならないじゃないですか。女性には「母親になれ」と教育するんですけど、それも身体的な問題が主ですね。なので、日本の教育は、男女とも「どういう大人になるか」というキャリアイメージ形成の中で「どういう家族をつくるかを考える」という主題は外してしまっている。「家族はかくあるべし」などと教育で教えられたら怖い」こともわかりますが、結婚、育児、家族に対して、若者が何のプランもイメージも持たないままですとすれば、それも深刻な問題だと思います。

田淵 子どもにとっての「良い父親」のイメージ、ロールモデルがないのは確かですね。家庭や地域での父親のあるべき姿が見えない。父親は「働いていて、家にいない」ものだ、との認識くらいしかないのかもしれない。

江原 「現代核家族調査」の子どもの回答でも、「父親だけが食事を一緒にとらない」との回答

が多かったですね。もちろん、毎日一緒に食事する家庭もあるでしょうけど。

田淵 それについては父親自身ではどうしようもない要因もあると思いますが、毎日一緒に食事できる父親と、毎日別で食事する父親。この二極化も厳しい問題ですね。

父親のロールモデルの話に戻ると、私事ですが、息子の通っている幼稚園では、父親同士で飲み会を定期的にかけて、いろんな情報交換をしているんですよ。最近は、「父親の会」を作って、父親が独自の企画を立て、子どもたちを巻き込んで、放課後活動を盛り上げている小学校なども増え始めていると聞きます。

もちろん、それに参加している父親は少数派ですが、そうした活動が子どもたちに良い影響を与えているようです。こうした面白いつながりを見て育つ子どもたち——特に男子ですが、ポジティブな将来像として、そういう父親になるのを夢にしてくれたらいいと思うのですが。

江原 家族内の男性、父親のロールモデルが、子どもの中にあるといいですね。働く姿、一人で暮らす姿だけでなく、カップルをつくったり、家族をつくったりする中での男性の姿も、男子には持っていてほしいと思います。

田淵 そういう父親同士のかかわりって、すごく楽しいんですよ。父親同士は何のしがらみもないですし、業種も全然違いますからね。普段得られないような発見がいろいろあって、面白いんです。ただ、ああしなれば、というようにあまり頑張ってしまうと苦しくなりますから、自分のできる範囲でやっています。

江原 楽しむことが大事ですね。

田淵 これは実感のレベルですが、父親同士が楽しそうにやっていると、子どももいろいろ話してきますし、子どもは父親の動きや姿勢を、よく見ているんだなと感じました。

江原 子どもに「良い父親」を示すことは、親子関係にもいい影響があるんですね。

田淵 自分の経験では、少なくとも短期的には、それなりにいい影響がある気がしますね。

江原 子どもとつながったり、子どもを介して

父親同士でつながったりできる。子どもを介して夫婦でつながるのも同様だと思います。仕事のつながりとは、全然違いますよね。

田淵 普段、子どもたちは、幼稚園で母親同士のつながりしか見ていません。だから、父親同士もこんな関係があるのだという発見が新鮮なようです。自分の父親と友達の父親が、こんなふうと一緒に話している、それはまさにコミュニティじゃないですか。それを子どもに見せる機会は、大事なのかなという印象があります。

江原 絶対、そうだと思いますよ。父親同士がつながっている姿があると、自分もそういうつながり、コミュニティを求めてもいいんだと思う。そして、それを求めるにはどうすればいいかと、さまざまなイメージがつかめます。



両親の関係が子どもに与える影響

江原 学生と話していて感じるのは、親が「いい結婚」のモデルを示すと、子どもは結婚したがるということ。「結婚なんて一生しない」と考えている人は、両親の関係が悪いというケースが多いんですね。だから、自分も結婚しないほうがいいと話す学生もいます。逆に、絶対に結婚したいと考えている学生に、その理由を尋ねると、「両親が年をとっても仲がいいんです」と話していました。子どもは本当に素直に親を見ているんですね。

女性の結婚志向が薄れている要因の1つは、周りにいい結婚モデルがないことなのではないでしょうか。

田淵 親が自分たちの姿を通じて、子どもに結婚のモチベーションを与えるのは大事ですね。

江原 人生は多様ですが、子どものころに親から受ける影響は計り知れないなと痛感しました。かつては女性には「こうしろ」という結婚モデルが強固にあったけれど、今はモデルの力が弱まった。男性には、結婚のモデルすらありません。なので、親の影響力が強くなっているのかもしれない。男女とも、結婚への「とっ

かり」を親に見出すようになってきているのだと思います。

男性に求められる家計責任

田淵 「男性が稼ぐべし」との固定観念は、男性にとって今日でも強く存在しています。

江原 そうですね。結婚していなくても、強く根付いているようです。

田淵 共働き志向でも、男性の側には「主たる稼ぎ手は自分なんだ」との考えがあります。女性の側が、それを望む場合もあるでしょう。

江原 そうですね。「現代核家族調査」でも、約8割の女性は、男性が家計責任を持つのを望んでいます。男性にお金を稼いでほしいということは、多くの女性の本音。この意識は強固ですね。

田淵 それと同時に、女性の側から、性別役割分業を推し進めるような考え方が出てきていますね。

背景には、家事・育児については、いまだに男性の参加水準が低いことがあります。アメリカの研究では、父親の家事・育児参加を母親側が嫌がる傾向があり、こうした意識も少なから

ずあるかもしれません。

江原 母親が嫌がる理由の中には、男性不信もあります。ある女性から「男性に育児を任せるのは心配」と言われたことがあります。「そもそも男性に育児ができるんですか」と。私は「できますよ」と答えましたが、「男性は乱暴だから」と。彼女は虐待などを心配していたのです。彼女は、もし自分の夫が育児に参加したら、「育児の忍耐力」がないから、きっと子どもに優しくできないだろう、と言うんです。

田淵 父親が育児参加して、うまくいっているモデルを知らないから、そのような心配があるのでしょうか。

江原 母親の多くは、決して、子育てを自分ひとりで思い通りにしたいから、男性に参加してほしいと考えているわけではないと思います。男性が育児している姿を知らないから、男性がしっかり育児をしてくれるかどうか不安を持っているんですね。

田淵 お互いが厳密なハードルを設定せずに、「いろいろなかわり方があってもよい」と考えていけばいいんですけれどもね。

江原 そのあたりの調整は、結構難しいですね。結婚年齢が高くなるほど、自分なりのライフスタイルがあり、家事や育児などに対する期待水準が高くなりますから。

田淵 そうですね。期待水準の高低は、自分の育った家庭からの影響も大きいです。みんな一定水準、自分の母親の家事と同じぐらいの水準は、期待しています。一方で、このような「家族のあり方」や「家族に対する期待」が再生産されていることは、重要ですね。

江原 そうですね。そのような家族のつながりが、アイデンティティにつながりますからね。ただ「理想の家族のあり方」は絶対的ではなく、時代や年齢によって変わっていかなければならないと思うのですが。

田淵 強い理想像をもっているからこそ、現実との距離が大きく、未婚化が進んでいるんですね。

固定観念が結婚観に与える影響

田淵 先日あるシンポジウムで、若者の引きこもりからの再出発支援の活動をしている人にお話をうかがいました。

特に印象的だったのが、引きこもりの男性は、「自分が稼ぎ手となって、妻や子どもを養うべき」との規範を強く内面化していることでした。だからこそ、手も足も出なくなって動けなくなってしまったとおっしゃっていました。

支援をしている人は、「そんなことを考えずに、お互い非正規でもいいから、カップルで所得を持ち寄って、やれる範囲で一緒にやっていけばいいのでは」と提案しても、引きこもりの男性は「そんなの絶対にだめ」と。

これには驚きましたが、言われてみればそうかもしれませんね。団塊の世代の父親像を「理想の父親像」「あるべき男性像」としてずっと見てきたわけですから、それが呪縛となって自分の行動を踏み出せなくなっている気がしました。

江原 私も、引きこもりの人の話を聞いたことがあります。やはり「働かなくては」との思いが非常に強いようですね。これは、現代の若者の結婚観にも似ている部分があります。

男女ともに「この水準の生活をしなくては」「子どもにはこうしなくては」との固定観念が強い。その条件が整わないため、結婚を回避・先送りするケースも生じていると思います。経済が右肩下がりでは、希望を達成することは難しくなるから、この傾向はますます強くなるでしょうね。

田淵 低成長経済に入ったことが、引き金になっているのは明らかだと思います。

今後は、核家族を早く形成できる人と、そうでない人に分かれていくかもしれませんね。前者には、収入がさほど高くなくても家族をつくられている、フレキシブルな人も含まれているだろうとは思いますが。

江原 でも、学生と話せば話すほど、「結婚は怖くてできない」という意見ばかり出てきます。

「収入が不安定でも、結婚していい」と思っている人はほとんどいないですね。

田淵 結局、働き方のモデルが、全然変わっていないわけですよ。言い換えれば、働き方の理想が変わっていないのです。

江原 働き方の理想を実現できないのに、どうして理想自体が変わらないのでしょうか。

田淵 実現できないからといって、簡単に“ガラガラポン”するわけにいかないのでは。一旦、ゼロにして、規範を再設定できればいいのですが。

江原 アイデンティティの問題ですか。

田淵 アイデンティティだけの問題ではないと思いますよ。

理想を再設定するには、現在の仕事や結婚・家族に対する理想の中間に何かが必要です。例えば、先ほどの「父親の会」のように、地域や学校で元気に輝く父親像などがもっと見られれば、男子は「こんな生き方もあるんだ」との認識ができます。新しいライフスタイルが、もう少し広がってくるかもしれませんね。

江原 例えば、父親同士のネットワークや、単身者・高齢者も含む社交術をもう少しつくり上げるのも方法の一つですね。核家族の集合的共同性というモデルがほころんできている。もしかすると核家族モデルも変わるかもしれない。バラバラの単身ではなく、多様な形を含みこんだ「家族プラスアルファ」みたいに。そういう家族のあり方はそう悪くないと思うんです。核家族だけ閉じて、孤立しては、やっぱり寂しいですよ。

田淵 一定の家族のあり方以外は排除するような傾向は強いですよ。これまでは、単身者はコミュニティの中で排除されている傾向があります。コミュニティ自体が、家族・世帯を中心に形成されてきています。

家族の内閉化と家族回避

江原 今までには核家族を中心に家族・世帯をつくってきましたが、これからは単身者が一層無

視できない存在になると思います。単身者世帯は将来4割近くになるとみられています（国立社会保障・人口問題研究所、「日本の世帯数の将来推計（全国推計）」（2008年3月推計））。

そうなったとき、社会がバラバラの単身だけではなく、集まったり引いたりする“なだらかな凝集性”があるほうが、みんな楽しいし、核家族も生きやすくなると思います。そうなることで、核家族を忌避する人たちも減るのではないのでしょうか。結婚を介した、親族の広いつながりも、人にとって決して不要なものではないと思います。

実際、核家族が持つ、閉じた世界を嫌がる人は少なくないと思います。扶養を提供する夫と、育児を提供する妻みたいな従来の核家族のモデルは、あまりにも内部閉鎖的共同性が強く、家族の孤立性が強いので、あまり選択されなくなったのではないのでしょうか。

田淵 “勝ち組”的な人たちが核家族を形成しやすく、昨今はそれを煽る傾向が強いですね。社会への信頼が低下し、家族が外に開かれていく機会が限られ、核家族自体が内閉化している傾向を感じます。家族の境界を越えた、人との多様なつながりが、子どもの健やかな発達に有益であるとか、そういった発想の転換が出てくるといいのですが。

江原 一見「家族の共同性の低下」と見える事態は、実は「家族の内閉性の強化」ゆえに家族リスクが高くなり、家族回避志向が生まれているということかもしれません。皆がリスクの高さを嫌い回避するだけだと、「おひとりさま」ばかりになってしまう。何か別のものを付加しないといい方向にいかないという実感があります。

「現代核家族調査」をみると、家族外との多様なネットワークは、現状ではまだあまり家族のサポートになっていないようですが、やはり外とのつながりは、核家族の息苦しさを解消できるように思います。

現在は、仕事と家庭だけで精一杯で、それ以外のネットワークに参加できないケースも多い

のかかもしれませんね。田淵さんは「父親の会」に参加され、恵まれていますね。親同士のコミュニティに関して、同じような考えを持った男性が集まっているのでしょうか。

田淵 それは明らかにありますね。ただ、もう少し広いコミュニティがあってもいいと思います。何も狭い地域などに限定する必要はありませんからね。

脱家族化とシングル化の関係

田淵 いろいろなデータを見ても、日本の家族は「脱家族化」や「脱制度化」などといった方向に向かっていない印象があります。例えば、ヨーロッパで広がっている同棲などは、日本ではまだ。近い未来にも、おそらく広がらないでしょう。

江原 ヨーロッパと日本は、なぜこれほど違うのでしょうか。

「家族を超える」「さまざまな人々の多様性も家族と認めるべき」などと、多くの本に書かれています。ただ、規範論ばかりで、現実には何が起きているかについては、データがないのですね。

田淵 唯一、「脱家族化」しているのは、未婚化・晩婚化が進んでいることです。

江原 あとは高齢者の一人暮らしが非常に増大していること。日本において、「脱家族化」とはシングル化とイコールの関係です。

田淵 地域が再編されないまま、単身化を中心とした脱家族化が進むと、孤独死をはじめ、単身男性を中心としたさまざまな問題が深刻化していきます。

江原 単身の男性だけでなく、女性もかなり貧困化しています。特に女性の高齢者に多いですから、これを何とかすべきですよ。

他方、親子関係、特に子育て世代の親が子どもに注ぐ強い関心は、少しも衰えてないように思います。若い世代を含めみなさん、子育てに対する責任感は強い。大学生でさえ、子育てについて、あれこれ議論をします。子育てについ

ては、男子も女子もあまり「脱家族化」していません。

田淵 おっしゃるとおりですね。子どもとの関係については、大きな変化は見られないように思います。

江原 子どもの教育競争については、家族総動員で取り組んでいる印象があります。出世競争の家族拡大版のような発想の家族主義とでもいえるのでしょうか。もっとも中国や韓国ほどではありませんが。

田淵 中国は、一人っ子が中心ですからね。

江原 東アジアは全体的にすさまじいですね。ただ、子育て以外では、家族内の個人の自立性は強くなっている。東アジアでは、家父長制が強く、女性にとってマイナスの規制が強すぎました。ですから、多くの女性は、一度家族から解放されたいという意識も強い。また男性も、家族責任から逃れたいという気持ちもあり、シングル化が徐々に広がっています。女性も男性も、その方が楽であると思いつつあるようです。

田淵 必ずしも、選択した結果としてのシングル化ではないですよ。

江原 そうですね。自分の事情にあわせてのことでしょう。「無理して再婚するつもりはない」「一人の方がよっぽど楽だ」と、女性はよく言いますからね。つまり、家族がリスク化しているんですよ。家族に対して愛情が求められ、投資しても、愛するものを失うリスクも大きい。だから回避するようになるのです。

家族が抱えるアンビバレンスとリスク

田淵 家族がポジティブ、ネガティブ、どちらの価値も持ちうるという状況は、まさに家族の両価性（両義性、アンビバレンス）ですよ。家族は、手に入れたい対象である半面、それが自分にとっての足かせにもなってくるところがあつて。また、「両極化」についてのお話がありましたが、自分のつくる家族が自分の望む姿になるかどうか不透明です。

家族を求めているけれど、近づききれない。

非常に両義的な存在ですね。

江原 グローバル化や雇用の流動化などによってアイデンティティの危機が強まり、家族に対する期待、家族共同性への期待が強くなっています。家族への情緒性が強まると、感情的一体感から、家族の喪失が耐えられない心理状態になるんですね。長く生きるほど、つらさが身にしみるようになってきますよね。人はダメージがある回数までは甘受できても、ある程度年齢を重ねると、愛するものを失うダメージが大きくなり甘受しにくくなるのではないのでしょうか。

子育てだけでも大変なのに、親の問題もあります。高齢の親をどう世話するかだけでなく、寂しがらせないために精神的にどうすればいいかという苦労もあります。

家族に対する規範が弱体化して、「～でなければならぬ」という拘束は少なくなった。代わりに、家族に対するケアが情緒化する。情緒化に巻き込まれていく人がいる一方で、そういう情緒化された家族関係を嫌い、従来、家族から得てきたサービスを、そうではない形で手段的に入手していこうとする人たちも、多くなる。その両方が同時に出ているのでしょう。

現在は、「家族に対する期待」には平均のようなものが成り立たない。分散が大きく、多様化しています。そのことも、全体としてはリスク化に結びつきます。家族や結婚について、平均的な期待を持つこと自体ができないのですから。

田淵 そうした多様化という背景もあって、家族をめぐる価値や規範がますますアンビバレントになり、様々な選択がリスクを含んだものになっていく。学生を相手に話す際、家族研究やジェンダー研究の観点から、何をメッセージとして伝えていくべきか、いつも悩みます。

当たり前かも知れませんが、「この事実、事例は、こういう説明が可能ですが、解釈の問題なので、これを自分の人生にどう生かすかは一人ひとりの選択、決定の問題です」と説明しています。

江原 それは、私も同じですよ。

田淵 もちろん、特定の家族像をポジティブなものとして示したくなることはよくあります。「こんな生き方もいいのでは」と言いたいこともあります。なるべく抑制するようにしています。私自身がアンビバレンスを感じているからかも知れませんが、どのような家族のあり方をどのように示すことができるか、うまく伝える言葉がなく、困ることが多いんです。

母子関係のリスクとネットワーク

江原 最近は、男性と女性の意識の違いや状況の違いについて、かなり情報が行き渡ってきたと思います。しかしまだまだ不十分なので、学生には「母親はこんなふうと思う」とか、「こんな仕事をしていると、こんなことが起こる」とか、多様な観点から話して、視点を変えて、見えないものが見えるようにしています。

私は、母性は両義的だと思うんですね。ある意味「母親になること」は怖いものです。子どものためなら、人生を棒に振ってでも何でもしようという気持ちに展開しやすい面もっている。そういう気持ちは、なってみないとわからない。なので、学生にあらかじめそういう情報を入れておく。「母親自身が、ある程度セーブしないと、子どもを飲み込むほどの怖さがあるんだよ」と。

田淵 やはり父親がそこに入っていないといけないのでしょうか。

江原 必ずしも父親でなくてもいいですが、母子関係には第三者が入っていたほうがいいでしょうね。1対1の親子関係では、互いが互いのために存在していることから、逃げ出せませんからね。

田淵 ネットワークをどうやって開いていくかですよ。コレクティブハウジングのように、現代版の“長屋”みたいなものをつくり出していく動きもありますよね。まだ普通の人が選択できる形までには広がっていませんが。

江原 そうならないのは、子育ても介護も、親

族・家族内でやるものとの考え方が非常に強いから。他人の介入を拒否したり、他人がやるべきでないと考えたり、他人に頼んでいる人を否定的に見たりする風潮があるからだと思います。

田淵 そうですよ。

江原 私は、ケアをもっとみんなと共有すべきという意見に賛成です。この10年くらいで、個人化はさらに進み、核家族は内閉化し、とくに母子関係は情緒化したと思います。私は、もう少し親子関係・母子関係を離して、広い親族関係はもう少し濃くしてもいいんじゃないかという思いがあるんです。

田淵 新しいつながりをどんな形で作っていくのか、これは試行錯誤であり、色々な可能性がありえますよね。

江原 高齢者が結構いい役割を果たす気がしますね。特に団塊世代の一人暮らしが増えていきますから、こうした単身者をうまく社会の中心的な層にして。

田淵 確かに、単身者だからこそ、地域とのかかわりが必要になるという側面がありますね。そのあたりの層をうまく活用する自治体政策がもっとあっていいですよ。

江原 “おじいちゃん” “おばあちゃん” 的な機能も欲しいですね。自分の孫だけを見るのではなく、地域全体の祖父母的な存在になるのがいいかと。

地域に、父親のつながり、母親のつながりなどが何層もありながら、子育てや介護を支えていくのが望まれます。経済的な面は、社会保障で行われたとしても、実際の「かかわり」みたいなもので何とか活かせないかなと。

これからの核家族

——「かけがえのない」関係とは

田淵 これまでの研究では、非常に集団論的というか、核家族の中のシステムとしてしか家族を見ていませんでした。家族と地域、家族と社会などの関係を見直す研究が、今後は求められ

るでしょうね。

江原 家族とアイデンティティのかかわりも重要だと思います。誰もが、「かけがえのない」唯一無二の関係をつくりたいと願って結婚します。同様に女性は、唯一無二の関係を求めて、子どもを命がけで産み、育てます。だから、どんなにキャリアを獲得しても、産もうと思う。そういう「かけがえのない」関係を求める傾向は、これからも続くと思います。だけど、「かけがえのなさ」だけでは、人は育ちません。いろいろなネットワークがあって然るべきで、このような二重性、三重性は、あっていいと思うんですよ。

田淵 現在、社会移動が小さくなり、都市でも一カ所に住み続ける人が増えています。そうすると、家族に限らず、生まれ育った地域においても「かけがえのない」関係がすごく大事になってきます。

江原 就職でも遠くへは行かず、地元にかかわりたい若者が多いそうですね。

田淵 この層が増えてくると、家族と地域のあり方も変わってくる可能性がありますね。

江原 私は、みんな自立して、バリバリ仕事して、アイデンティティや地域なんか関係ないといった“自立した個人モデル”は幻想だと思っています。これだけで生きていける人は相対的に少ないと思います。だから「自分の子どもが欲しい」という志向は、将来も絶対になくならない。「自分の子ども」だとか、アイデンティティに対する志向性は変わらない。家族、つまり何でも許せる「かけがえのない」関係を求める部分は、永遠に残ると思うんです。

田淵 やはり家族だけを変えていくわけにはいかないのだから、単身者であっても地域に「かけがえのない」人間関係を持って暮らしていける仕組みが必要ですね。

江原 そうですよ。単身者であってもかかわれる地域組織をつくるか。ありきたりではありませんが。

田淵 そのありきたりなことが、なかなか実現できない。



江原 他方、監視社会化も進んでいます。変な人にかかわりたくないと、多くの人が思っています。

田淵 相反する考え方が、拮抗していますね。社会全体が非常にアンビバレントな状態なのかなという気はしますけれど。

江原 難しいですね。開かれた社会を願いながら、逆に、学校も家族もどんどん内閉化し、何もかもを“ロックアウト”しかねない風潮です。社会が多様化しているから、他人のことを予測できない、信頼できない。

田淵 そのような安全・安心への過剰な懸念を、メディアが過剰に煽っている感じがします。それらは、人々が純粹に求めているわけではないと思います。

江原 安全・安心を子どもに求めない親はいません。たしかにメディアに煽られています、親が子を守りたい気持ちは当然だと思います。だからこそ、家族が開かれることはなかなか難

しいのでしょうかね。問題の難しさは、今後も変わることはないでしょうね。

※この対談は、2010年1月18日に行われたものです。

文献

財団法人家計経済研究所編，2009，『現代核家族のすがた——首都圏の夫婦・親子・家計』財団法人家計経済研究所。

財団法人横浜市男女共同参画推進協会，2009，『若年女性無業者の自立支援に向けた生活状況調査報告書』財団法人横浜市男女共同参画推進協会。

えはら・ゆみこ 首都大学東京大学院人文科学研究科教授。主な著書に『Do! ソシオロジー』（共著，有斐閣，2007）、『ジェンダー秩序』（勁草書房，2001）など。社会学・ジェンダー研究専攻。

たぶち・ろくろう 上智大学総合人間科学部 准教授。主な著書に『現代日本人の家族』（共著，有斐閣，2009）、『ポジティブ・アクションの可能性』（共著，ナカニシヤ出版，2007）など。家族社会学専攻。